

马可·波罗所记中国火葬风俗

马晓林

(南开大学历史学院)

火葬，源于佛教，^①从五代到宋元时期在民间大为流行。马可·波罗从唐兀地区（Tangut）（Chap. 59）开始记录元朝各地火葬风俗。《元典章》记载，至元十五年（1278），元朝颁行《禁约焚尸》，规定土著汉人禁用火葬，但从军应役并远方客旅诸色目人，许从本俗，不须禁约。但这条法令似乎没有奏效，火葬仍然盛行。据统计，元朝中书省直辖区“腹里”、各个行省乃至吐蕃，都有火葬，涵盖众多民族。目前考古发掘的元大都火葬墓 30 余座，形制规格各异，墓主人最显赫者是唐兀人耿完者秃和汉人张弘纲。元代火葬盛行的原因，一是契丹、女真风俗的影响，二是佛教信仰的影响，三是土地资源紧缺。^②

考古发现的辽金墓葬证明，当时颇为流行用木、草、石制成“真容偶像”，将骨灰置于其中。元代畏兀儿人也仿效其法，将骨殖（骨灰）“似人模样包裹”（《元典章》“畏兀儿丧事体例”）。^③元朝禁止畏兀儿人用“真容偶像”，但不禁止他们火葬。

马可·波罗（Chap. 59）记载的唐兀地区尤其是沙州（敦煌）的丧葬，与中原葬俗基本相同。^④焚烧纸钱，制作纸偶，道路祭祀，等等风俗，在唐末已流行。根据出土实物资料，冥币的早期材质是贝、泥、木，在唐代以前已经出现纸钱。^⑤马可·波罗在唐兀地区记录了一种特殊葬俗：“其尤怪者，卜人有时谓不宜从门出丧，必须破墙而出。”这被现代学者称为“死者之门”。据玉耳、考狄（Yule-Cordier I, 209）统计，印度、巴厘岛、荷兰、意大利中部、法国都有类似的风俗。金代党怀英（1134—1211）《王去非墓表》：“北邻有丧，由东户出则犯禁而众不利，南则邻者忌之，以西北则人居不可行。先生（王去非）曰：‘世安有死而不得葬者。葬而害众，宁独及我。’坏其蚕室之壁出焉。”^⑥这是山东平阴的事情，却与马可·波罗所记唐兀地区风俗极为相似。而且马可·波罗频繁提及火葬的地区是今河北、山东、江苏、浙江的运河沿线（河间府、长芦、东平、邳州、宿豫、淮安、宝应、杭州）。总之，马可·波罗记载的唐兀地区种种葬俗，应该可以涵盖中国大部地区。

马可·波罗讲述“世界之一切偶像教徒皆有焚尸之俗”，但“偶像教徒”不一定是佛教信徒。马可·波罗（Chap. 129）记载的秃落蛮（Tholoman）的火葬，用小匣盛其余骸，携至高山大洞中悬之。这是叙州（今四川宜宾）古代僰、土僚民族特色的悬棺葬。根据目前考

① 佛教葬法有火葬、野葬（尸陀林葬）、水葬、全身葬。其中，火葬对中国社会产生的影响最大。参王磊：《试论中古时期佛教徒的全身葬法》，《中山大学学报》2013年第2期，第107—114页。

② 徐苹芳：《宋元时代的火葬》，《文物参考资料》1956年第9期，第21—22页。李伟敏：《北京地区的火葬墓及相关问题研究》，《考古》2012年第5期，第65—73页。

③ 张韶华：《元代火葬风俗的两个特别现象》，《寻根》2022年第1期，第112—117页。

④ 霍巍：《宋元时期的敦煌葬俗——〈马可波罗游记〉中的一段史料》，《敦煌研究》1990年第1期，38—42页。

⑤ 余欣：《冥币新考：以新疆吐鲁番考古资料为中心》，《世界宗教研究》2012年第1期，第172—181页。

⑥ 王新英辑校：《全金石刻文辑校》，长春：吉林文史出版社，2012年，第286页。

古调查，悬棺葬没有鲜明的火葬成分，但川南、峡江地区悬棺葬的葬具有较小的棺、匣（函、箱），^①大概其形制与骨灰函相似，使马可·波罗产生了火葬的误解。除了佛教徒，也有道士实行火葬。这条史料来自杭州（方回：《桐江续集》卷三五《普同塔记》），与马可·波罗同时代。马可·波罗确实记载杭州（行在）有火葬风俗（Chap. 152）。

附：马可·波罗所记蒙古葬俗

马可·波罗（chap. 69）记述，成吉思汗及其后裔葬在一座名为阿勒台（Altai）的大山中。尽管阿勒台山显然是误记，^②但是葬于高山上，确实是蒙古葬俗。《元朝秘史》记载，王汗（Ong Qan）、札木合（Jamuqa）死前都曾说，请将我的尸骨埋葬在山崖高地。^③成吉思汗出征至蒙古高原东部的合勒合河（Qalqa）畔，将领畏答儿（Quyildar）死去，成吉思汗命人将他安葬在河边的半山崖（keltegei qada）。^④蒙古高原考古发现的13-14世纪墓葬，少数集中于墓园，多数散布于各地的山崖中，多在半山腰或地势稍微隆起之处，利用天然岩穴、石缝安葬。葬式颇为简易，有的棺木完备，有的将蒙古帐房或车的木构件改造为棺，随葬品较少，仅墓主人日常服饰、器用而已。^⑤

马可·波罗记述，蒙古君主死后，归葬途中，遇到的马、人皆被杀死。蒙古人用马陪葬和祭祀，已得到 Boyle 的充分论证。蒙古皇室施行人殉，欧洲使者柏朗嘉宾、亚美尼亚的 Kirakos of Ganzak、波斯的术兹札尼和拉施特等都有记录，^⑥但汉文资料中却没有明确记载。

⑦

① 陈明芳：《中国悬棺葬》，重庆：重庆出版社，2004年，第65-76、126-131页。陆敬严：《中国悬棺研究》，上海：同济大学出版社，2009年，第100-107、175页。石钟健：《四川悬棺葬》，《石钟健民族研究文集》，北京：民族出版社，1996年，第120-135页。

② 白石典之：《チンギス・カンの墓》，白石典之编：《チンギス・カンとその時代》，勉誠出版，2015年，第321-325页。

③ 余大钧译注：《蒙古秘史》，石家庄：河北人民出版社，1999年，第164节，第112页；第201节，第159页。

④ 余大钧译注：《蒙古秘史》第175节，第124页。

⑤ У. Эрдэнэбат & С. Хүрэлсүх, “Нартын Хадны Оршуулга”, *Studia Archaeologica*, Tom. (IV) XXIV, Fasc. 23, Улаанбаатар, 2007, тал 332-359. Ulambayar Erdenebat und Dovdoi Bayar, “Eine mittelalterliche Felshoehlenbestattung aus der suedlichen Mongolei”, *Beiträge zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie*, Band 24, Mainz: Verlag Philipp von Zabern, 2004, pp. 45-66.

⑥ John Andrew Boyle, “The Thirteenth-Century Mongols’ Conception of the After Life: The Evidence of Their Funerary Practices,” *Mongolian Studies*, no. 1 (1974): 5-14.

⑦ 刘浦江：《契丹人殉制研究——兼论辽金元“烧饭”之俗》，《文史》2012年第2期，第179-205页。

中国火葬風俗に関するマルコ・ポーロの記録

馬曉林

(南開大学歴史学院)

火葬は、仏教に起源を持ち、五代から宋元の時期にかけて民間で大いに流行した。マルコ・ポーロはタングート地方(Chap. 59)から、元朝各地の火葬の風俗を記録し始めている。『元典章』によれば、至元十五年(1278年)、元朝は「禁約焚尸」を公布施行し、現地に住む漢人による火葬を禁じたが、軍役に就く者及び遠方からの旅客等様々な人々は、各々の習俗に従うことを許し、禁止の対象とはしなかった。しかし、この法令は効力を発揮しなかったようで、火葬は相変わらず盛行した。研究によれば、元朝の中書省直轄区である「腹里」、各々の行省、さらには吐蕃(チベット)に至るまで、火葬は行われ、数多くの民族に及んでいた。現在までに考古学的に発掘された元大都の火葬墓は30基余りに上り、その形制・規模は様々であり、墓主の中で一番の権力者は、タングート人の耿・完者秃(Öljetü)と漢人の張弘綱である。元代に火葬が盛行した原因としては、第一に契丹・女真の風俗の影響、第二に仏教信仰の影響、第三に土地資源の逼迫が挙げられる。^①

考古学的に発見された遼・金時代の墓葬は、当時、木・草・石で「真容偶像」(本物のような人形)を作り、その中に遺骨を納めることがかなり流行していたことを証明している。元代の畏兀兒人(ウイグル人)もこの方法を模倣し、遺骨を「人の姿形に包む」ことがあった(『元典章』「畏兀兒喪事体例」)^②。元朝は畏兀兒人の「真容偶像」使用を禁止したが、火葬を禁じることはなかった。

マルコ・ポーロ(Chap. 59)が記録したタングート地方、特に沙州(敦煌)における葬送儀礼は、中原の葬俗と基本的に同じであった。^③紙銭を焼いたり、紙の人形(紙偶)を作ったり、路上で祭祀を行ったりするといった風俗は、唐末には既に流行していた。出土した実物資料によれば、冥銭(葬儀で使う偽札)の初期の材質は貝、土、木であり、唐代以前に紙銭が出現している。^④マルコ・ポーロはタングート地方で、ある特殊な葬俗を

① 徐萃芳：《宋元時代の火葬》，《文物参考資料》1956年第9期，第21—22頁。李偉敏：《北京地区的火葬墓及相關問題研究》，《考古》2012年第5期，第65—73頁。徐萃芳「宋元時代の火葬について」、《文物参考資料》1956年第9期，21—22頁。李偉敏「北京地域における火葬墓と関連する問題の研究」、《考古》2012年第5期，65—73頁。

② 張韶華：《元代火葬風俗の二つの特別現象》，《尋根》2022年第1期，第112—117頁。張韶華「元代火葬風俗の二つの特異な現象」、《尋根》2022年第1期，112—117頁。

③ 霍巍：《宋元時期的敦煌葬俗——〈马可波罗游记〉中的一段史料》，《敦煌研究》1990年第1期，38—42頁。霍巍「宋元時期的敦煌葬俗：『東方見聞錄』の一史料をめぐって」、《敦煌研究》1990年第1期，38—42頁。

④ 余欣：《冥幣新考：以新疆吐魯番考古資料為中心》，《世界宗教研究》2012年第1期，第172—181頁。

記録している。「このお告げはよく死者の縁者に、遺体を家の門から運び出すのはよくないと言い、星とかその他その門に反しているものの原因を見つける。それで、死者の縁者は他の門から出させたり、多くの場合壁を壊させてそこから出させる。」これは現代の研究者によって「死者の門」と呼ばれている。Yule-Cordier (I, 209) の統計によれば、インド、バリ島、オランダ、イタリア中部、フランスにも同様の風俗がみられる。金代の党懐英(1134-1211)の『王去非墓表』には次のようにある。「北隣に葬儀があった。(葬列を)東戸から出すのは禁忌に触れて皆にとって不吉であり、南から出すと隣人が忌み嫌い、西北からでは人が住んでいて通れない。先生(王去非)は言った。『この世に、死して葬られぬ者があるか。葬ることが皆に害を及ぼすなら、(その害が)どうして私だけに及ばないことがあるか』。そして、自分の蚕の部屋の壁を壊して(棺を)出した。」^①これは山東平陰での出来事であるが、マルコ・ポーロの記すタングート地方の風俗と極めて似ていた。さらに、マルコ・ポーロが火葬に言及している地域は、現在の河北、山東、江蘇、浙江にまたがる運河沿線(河間府、長蘆、東平、邳州、宿豫、淮安、宝応、杭州、紹興)である。要するに、マルコ・ポーロが記録したタングート地方の種々の葬俗は、中国の大部分の地域にも通じると考えられる。

マルコ・ポーロは「世界のあらゆる偶像教徒には焚尸の俗がある」と述べるが、「偶像教徒」は必ずしも仏教徒を指すわけではない。マルコ・ポーロ(Chap. 129)が記録するトロマン(Tholoman)の火葬では、小さな箱に遺骨を納め、高い山の大きな洞窟に運んで懸ける。これは叙州(今の四川宜賓)における古代の僰・土僚の民族的特色を持つ懸棺葬である。現在の考古学的調査によれば、懸棺葬には明確な火葬の要素は認められないが、川南・峽江地域の懸棺葬の葬具には小さな棺・匣(函・箱)があり、^②その形制はおそらく骨灰函と類似していたため、マルコ・ポーロに火葬の誤解を生じさせたものと考えられる。

仏教徒に加えて、道士による火葬の事例も存在する。当時杭州に居住していた方回(1227-1307)の「普同塔記」(『桐江續集』卷三五)にこれを記録した。マルコ・ポーロも確かに杭州(行在)に火葬の風習があったことを記録している(Chap. 152)。

余欣「冥幣新考：新疆トルファン考古資料を中心に」、『世界宗教研究』2012年第1期、172～181頁。

① 王新英輯校：《全金石刻文輯校》，長春：吉林文史出版社，2012年，第286頁。王新英編『全金石刻文輯校』、長春：吉林文史出版社，2012年、286頁。

② 陳明芳：《中国懸棺葬》，重慶：重慶出版社，2004年，第65-76、126-131頁。陸敬嚴：《中国懸棺研究》，上海：同濟大學出版社，2009年，第100-107、175頁。石鍾健：《四川懸棺葬》，《石鍾健民族研究文集》，北京：民族出版社，1996年，第120-135頁。

陳明芳『中国懸棺葬』、重慶：重慶出版社、2004年、65～76、126～131頁。陸敬嚴『中国懸棺研究』、上海：同濟大學出版社、2009年、100～107、175頁。石鍾健「四川懸棺葬」、『石鍾健民族研究文集』、北京：民族出版社、1996年、120～135頁。

付記：モンゴル葬送習俗に関するマルコ・ポーロの記録

マルコ・ポーロ (chap. 69) によれば、チンギス・カンとその子孫はアルタイ (Altai) という大山に葬られたという。アルタイ山は明らかに誤記であるものの、^①高地に埋葬する習俗は確かにモンゴルに存在した。『元朝秘史』には、オン・カン (王汗) とジャムカ (札木合) が死に際して「我が遺骸を崖の高い場所に埋葬せよ」と遺言したことが記されている。^②チンギス・カンがモンゴル高原東部のハルハ河 (Qalqa) 畔に出征した際、部下のクイルダル (畏答儿) が戦死すると、チンギス・カンは彼を河辺の崖中腹 (モンゴル語: keltegei qada) に葬るよう命じた。^③モンゴル高原における 13~14 世紀の考古学的墓葬遺跡は、一部が集中墓地だが、大多数は各地の崖地に分散しており、多くは中腹や微高地に位置し、天然の岩窟や岩の裂け目を利用して埋葬されている。埋葬形式は簡素で、棺が完備されている場合もある一方、モンゴルのゲル (モンゴル語: gher) や車の木部材を改造した棺も見られ、副葬品は少なく、墓主の日常的な衣服や道具類に限られている。^④

マルコ・ポーロはまた、モンゴル君主の死後、遺体を葬地に移送する途中で出会った人や馬をすべて殺したと記述する。モンゴル人が馬を殉葬や祭祀に用いた事実については、J・A・ボイルの詳細な研究によって充分証明している。モンゴル皇室が人殉を実施したことについては、欧州の使節プラノ・カルピニ (Plano Carpini)、アルメニアのキラコス・ガンザケツィ (Kirakos of Ganzak)、ペルシアのジュズジャーニー (Juzjani) やラシードウッディーン (Rashid al-Din) らが記録を残しているが、^⑤漢文史料には明確な記載が見当たらない。^⑥

^① 白石典之：《チンギス・カンの墓》，白石典之編集：《チンギス・カンとその時代》，勉誠出版，2015年，321-325頁。

^② 余大钧译注：《蒙古秘史》，石家庄：河北人民出版社，1999年，第164节，第112页；第201节，第159页。余大钧译注『蒙古秘史』、石家庄：河北人民出版社，1999年，第164節、112頁；第201節、159頁。

^③ 余大钧译注：《蒙古秘史》第175节，第124页。余大钧译注『蒙古秘史』、第175節、124頁。

^④ У. Эрдэнэбат & С. Хүрэлсүх, “Нартын Хадны Оршуулга”, *Studia Archaeologica*, Tom. (IV) XXIV, Fasc. 23, Улаанбаатар, 2007, тал 332-359. Ulambayar Erdenebat und Dovdoi Bayar, “Eine mittelalterliche Felshöhlenbestattung aus der suedlichen Mongolei”, *Beiträge zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie*, Band 24, Mainz: Verlag Philipp von Zabern, 2004, pp. 45-66.

^⑤ John Andrew Boyle, “The Thirteenth-Century Mongols’ Conception of the After Life: The Evidence of Their Funerary Practices,” *Mongolian Studies*, no. 1 (1974): 5-14.

^⑥ 刘浦江：《契丹人殉制研究——兼论辽金元“烧饭”之俗》，《文史》2012年第2期，第179-205页。刘浦江「契丹人殉制研究——兼论辽·金·元的「烧饭」习俗を論ず」『文史』2012年第2輯、179~205頁。